

信仰の対象となったマリア

97K05。古俣貴彦

第1章 序文

聖母マリアが聖書の中で、真実に信仰の対象として規定されていないのは周知の通りであるが、しかし、その信仰は民衆の間に広まり、今日においても陰を落とすことはない。母なるものへの憧れは時代や体制を越えて、誰もが等しく抱き、権力や教義で破壊することのできない概念で、人が自然のことわりに従って、生まれ、生き、愛し、死ぬ限り、母なるものは永遠に絶対的な存在であるとするれば、それまでのことだが、では、なぜ、マリアであったのだろうか。長く続いた父権制の時代にあっても、全世俗的な時代にあっても衰えることのないその信仰は何処からくるのだろうか。

永遠の母なるものがどのように形成され、どのように信仰されたか探り、そして、人々の心情にどうとらえられたか探ってみたい。キリスト教の第一の本質であり、原点である聖書から、マリアはどのような人物であるか考え、そして、キリスト教がユダヤの地に誕生したとき、すでにそこにあった古代女神信仰から、マリアが民衆の間でどのように位置付けされたか、そして、中世に至って、時代の変化をものともしないマリアの姿がどう描かれたか見てみたい。

第2章 聖書の中のマリア

新約聖書の中でマリアを直接に語っているのは、『マタイ福音書』『マルコ福音書』『ルカ福音書』『ヨハネ福音書』の四つの福音書である。また、『使徒言行録』『ローマ人への手紙』『ガラテヤ人への手紙』『ヨハネ黙示録』にもマリアという名前を使わずにほんのわずかに触れている。しかしながら、これら書簡のうち、同様の内容を述べているとはいえ、例えば、福音書にあっては互いに一致する点は少なく、矛盾する個所も多い。だから、2世紀にはこの問題に対して神学論争も起こっている。そこでは、イレナエウス（130/140頃～202頃）というラテン教父は「キリストの福音は唯一のものであって、主なる神はただこれを4つの姿で伝えるようお望みになった。」と述べた。これに異議を唱える者は異端とされ弾

圧されることになった。神は人間にはおよびもつかぬ理解不能なことをすることがある。これが神学の切り札となっていて、いずれにせよ、ここにあげた福音書にのみマリアについて言及されているのであり、新約聖書でのマリアの登場は少ない。新約聖書で記述の少ないマリアがどうして人々の関心を引くようになったか、ここでは、聖書の中でのマリアの役割、扱いから見てみる。

1. マタイ福音書

順序が逆になるが、マルコ福音書とマタイ福音書を比較しながら読むと、聖書学者の指摘のように、手の込んだ修正や潤色の多いのがわかる。2人はかなり神学的に思想が異なるが、マタイの修正はやむにやまれぬ事情による。それは、ユダヤ社会に対する配慮であり、イエスの教えを再び旧約の律法に結びつけ、キリスト教をあらためてユダヤ社会に受け入れさせようという意図があったようである。

そうなると、マタイ福音書のマリアは、ユダヤの父権制社会に配慮することによって、女性蔑視の対象になりかねない。しかし、ユダヤの社会にキリスト教を受け入れさせるために、イエスの誕生を神聖なものとするには、マリアが、蔑視の対象者と同様の扱いでは非常に都合が悪く、ここではむしろ、特別な女性としてはならない。現にマタイはマルコと異なり処女降誕を採用しており、イエスはマリアの長男というのではなく、マリアはキリストの母と視線を反転させている。しかしながら、処女降誕はユダヤ神話にはない。マタイはユダヤ教徒をキリスト教に改宗させるため、ユダヤの律法や社会に配慮したことは先に述べたが、イエスの誕生も、「見よ、若い女が身ごもり、男児を産み、インマヌエルと呼ばれるであろう。」(イザヤ7・14)という預言者イザヤの言葉の成就として納得させたかったに違いない。だが、イザヤの「若い女」とは特に処女というわけではなく、マタイが参考にしたギリシャ語旧約がヘブル語の若い女を処女と誤訳していて、それが意図的なものかは別として、いずれにせよマタイはギリシャにおける処女の地位の高さからも、偉大な男児を産むのは神の目にとまった特別な女性として、イエスが神聖であることを強調したかったのだろう。

マリアは、ベツレヘムでイエスを産むためにエジプトからの帰還の後、すぐに夫ヨセフと共に発つ。お産のためにわざわざ遠い町まで出かけなければならなかったのは、やはり旧約の預言の成就のためである。そこでマリアは出産するのだが、家畜小屋で出産したわけではない。そもそも夫のヨセフは一介の大工職人をしているが、由緒正しいダビデの末裔であり、名門貴族である。「そして彼らは家

の中に入り、子供とその母マリアを目にすると、彼に跪拝した。それから宝の箱を開け、黄金、乳香、没薬を贈りものとしてさしだした。」(マタイ2・11)と記述しており、家の中できちんと出産して、高価なお祝いを受け取っている。この祝いの品物を持ってきたのは、学者と記述があり、現代では、天文学者、すなわち占星術にたけた者である。キリスト教神話では後に東方三国の王となっている。その中の一人は肌が黒く、エチオピアの王というのだから作り話に違いはないが、そのような人物の訪問を受けているのだから家畜小屋で出産するほど貧しくはない。

マタイの記述による歴史上の人物としてのマリアは、従順な父権制における模範的な主婦であり、ダビデの末裔としての夫ヨセフに従い、黙々と生きた女性であった。また、息子の磔刑に姿を見せないが、マリアはキリストの母として、普通の母とは異質な、一般女性とは違う特別な存在として描かれている。

2. マルコ福音書

マルコ福音書にイエスの誕生や幼少期の話は出てこない。福音書の実伝達に関して、このことが他の福音書より史実を忠実に伝えている。なぜならば、宗祖や英雄ばえてして幼少と将来の活躍とのつじつまを合わせるため、その内容を美化しがちになる傾向にあるからである。しかしマルコが史実のために福音書を作成したと考え、その内容を事実と受け止めるというのとは違う。実際マルコはイエスの神聖さを強調するため、奇跡の御業をふんだんに取り入れている。ところがマリアのこととなると、マルコは非常に即物的である。

マリアは貧しい大工の夫ヨセフの妻として描かれ、マタイのような名門の夫の妻ではなく、また子沢山な母親である。またイエスの兄弟、姉妹にも言及されている。イエスの出生は、処女降誕といった劇的なものではなく、貧しく、田舎育ちの人間として描かれ、メシアであるとはユダヤの民衆には信じがたいものであった。イエスの言動も当時のユダヤの習慣や律法を無視する過激なものが多く、マタイとは正反対のとらえ方である。

そのようなイエスと、マリアとの関係を見てみる。イエスが故郷で悪霊について説いていると、誰かが母マリヤを呼びに行った。そのとき息子が狂っていると聞かせられ、現場に駆けつけたが、そこでイエスに「私の母とは誰のことか、神の御心を行う人こそ、私の兄弟、姉妹、母なのだ。」(マルコ3:33~35)と言われた。もっともこのときに自分の息子が神の子であり、メシアと気づいていれば

家族総出で迎えには行かなかっただろうが、それでも息子の言葉にマリアは啞然としただろう。現代でも家族や血縁といった心の支えが取り沙汰されるのに、さらにそれが強かった当時としては、理解を絶するものだ。イエスの母親に対する態度は冷ややかなものであり、女性全般にそうであったかといえば違い、マリア以外の女性にはやさしく、十字架にかけられたとき、あれほどの女性が集まったのがなによりの証拠である。マリアについての言及はこれだけなのである。

マルコのマリアは冷淡な扱われ方で、そのイメージは、子沢山で、早くに夫に先立たれ女手一つで子供たちを育て上げなければならない母親、おそらく、情の深い子供思いの母親であった。しかし、磔刑の息子の言動を理解することができず、その息子からはうとまれ、心を痛め通さなければならなかったつらい女性であった。

3. ルカ福音書

この福音書の著者が誰かははっきりしないところではあるが、ルカは福音書記者の中でも最も文才に長けた、想像力豊かな作家である。続編の使徒行伝に至っても同様ではなかろうか。また旧約の利用のしかたも、マクイのユダヤ社会を意識した、預言の成就とかいうものではなく自由である。

身ごもりのお告げはここでは、マリア自身に大天使ガブリエルによって、夢ではなく現実に現れて告げられる。「恵まれた女よ」という呼びかけで始まるが、この恵まれた女とは、預言的尊称で、ルカはマリアを生涯の使命をはっきり自覚する女性としている。天使の訪問はヨハネの知らぬままの出来事で、その存在はマリアの背後に隠れてしまっている。「マリア、怖れることはない。あなたは神の恵みを得たのです。あなたば身ごもり、男の子を産む」(ルカ 1 : 30~31) これはゼファニア 3 : 16~17 の預言が下敷きになっていて、ルカはマリアとシオンとを同格としている。シオンはイスラエルの民であると同時に、彼らの拠点を意味し、マリアを救いの約束の地の象徴としている。「聖霊があなたの上におり、至高の方があなたを覆うであろう。それゆえあなたより生まれる聖なるものは神の子と呼ばれる」(ルカ 1 : 35) と続き、ここは、出エジプト記 40 : 1~34 の結語の要約的改作となるが、つまり、モーセが臨在の幕屋に入ってはならなかったように、ヨセフもまたマリアの中には入れず、イエスが神の子であることを強調し、マリアの処女懐妊が神話的に正当化され、マリア自身もまた神話的な人物へと変容して行くことを意味する。

さて天使の告知後、親戚のエルザベツも身ごもっていると聞かされ早速彼女のもとに出かけた。そこでマリアはマニフィカト（ルカ1：47～55）を唱える。マニフィカトはヨーロッパ音楽に数多くの名曲を生み出したが、マリアに関してこれはさまざまな問題を提示してしまう。身分の低いマリアにあってなぜこれほどの教養があったのかという問いである。ユダヤ社会で子供の家庭内教育は母親の役目、また子供たちの身に付けた教育、教養からもマリアは無学文盲であったとはいえないが、14、15歳で結婚した田舎の貧しい娘が旧約に詳しいというのはあり得ない。マニフィカトの構成の妙はどうであれ、マリアは「はした女」と自称し、ルカもまたそれを強調している。身分の低い女性だからこそ神は自らの救済道具として彼女を選んだのではないか。だからマニフィカトは権力の座のある者と抑圧されている者、裕福な者と貧しい者の立場を神が逆転させてくれるという確信を表明しているのではないか。

イエスの出生については、マタイとは格段に差が生じる。ルカが再三にマリアの貧しさを強調していることは先に述べたが、その象徴といってもよいのが家畜小屋での出産ではないだろうか。マリアはそこで1人で出産しているに違いない。父親が立ち合うことは許されない社会であったから。また訪ねて来たのは東国の占星術者ではなく羊飼いのみである。

それからイエスが12歳になった年。家族で過越祭に加わるためエルサレムに出てきた。ところが同郷の一行と帰路についた途中、イエスがいないことに気づきエルサレムに戻ってみると、イエスは教師の言葉に耳を傾け、問答をしていた。そこでマリアはイエスをたしなめるが、逆にイエスは「どうして私をさがしたりしますか。だって私、ちゃんと自分の父の家にいるでしょう。わかりませんか」（ルカ2：29）と言い放った。取りようによれば、ヨハネに対する大変な侮辱である。ユダヤ教では家庭は最小単位の宗教共同体であり、父親が家父長の資格において一種の司祭といえる。しかし神殿を自分の家と言い放つのは、単にヨセフの親権だけでなく、倫理的宗教的資格を否定することになる。だから、イエスの言動をヨセフとマリアは理解することができなかったのではないか。

しかし、マニフィカトをイエスが胎内にいるうちに唱えたマリ了にとって、それが理解できないというのは少しおかしい気がする。ここにルカのマニフィカトによる矛盾がまた一つ浮かぶことになり、その矛盾の埋め合わせが必要となる。ルカはその際、マリアの行動と目的を曖昧にすることで解釈の幅を広げている。悪霊について説いている場面では、マルコは明確に「むりやり連れもどす」と記しているが、それに対してルカは「ある日、彼の母と兄弟が彼のところへやってきた。しかし群衆のために彼のそばにちかづけなかった」（ルカ8：19）と表現し、

もしかしたらイエスの説教を聞きたかったとも解釈できるようにしている。いずれにせよマルコ同様、イエスの母親に対する冷淡な態度は、ルカに至って消すことができないでいる。

ルカのマリアは処女降誕の神秘的な女性というイメージ、また貧困のうちに心労の絶えない生活を強いられながらも気丈に生き、社会的な常識と教養を持ち合わせた女性で、そして夫に黙従するだけではない積極的な面もあったという二つのイメージがあるのではないか。

4. ヨハネ福音書

ヨハネ福音書は冒頭の「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」(ヨハネ1:1)からして、キリスト教の本質、ユダヤ＝キリスト教的思惟の根底を宣言している。つまり神学的な装いが強い福音書で、他の福音書と異質なものを含んでいる。また、ヨハネはこの福音書を自分の属する共同体のために書いている。推定の根拠になる箇所は、史実的な信憑性がある。例えば、イエスによって盲目が治された少年の母親がファリサイ派の連中の前に引き出され、その理由を迫られた場面では、母親は息子に聞いてくれと回答を濁す。「彼らユダヤ人たちは、イエスを救世主などと公言する者を会堂から追放することに決めていたからである」(ヨハネ9:22)と、著者自身ユダヤ人たちを恐れ、ファリサイ派によって会堂を追放されたユダヤ人キリスト教徒によって形成された共同体のために、福音書を記述している。

さて、この福音書には「マリア」とは一切記されていない。イエスの母とか、母、あるいは彼の母というような呼称である。マリアという名は新約には珍しくなく、ヨハネは何らかの理由で他の女性と異質なものであると、区別したかったのではないか。しかし、それを証明する箇所はなく不明なままである。

マリアの最初の登場はカナの婚礼である。イエスは弟子と共に招待されていたが、マリアもそこに同席していた。宴会で葡萄酒が足りなくなると、マリアはそのことをイエスに伝える。しかしイエスは「女よ、私のなすことは、あなたに何の関わりがありますか。私の時はまだ来ていない」(ヨハネ2:4)と冷ややかな態度をとる。

福音書記者たちが伝えているように、イエスは生涯で多くの女性と遭遇しているが、母親に対する態度はどれも冷淡なものである。また、ここでもマリアは息子を理解できないでいる。何かしるしでも与えなければキリストを信じることが

できない、世間並みの支持者と同じである。他人のことまで気を配らないではいられなく、世話好きな女性だが、「私たちがこの目でたしかめ、あなたを信用できるように、どんなしるしをしめしていただけますか」(ヨハネ6:30)という弟子以上に決して出ない存在である。

カナの婚礼にてマリアは何か手伝いのためにやってきたように思われる。葡萄酒のことに気を配っている彼女は、ルカの伝えるマルタ、マリア姉妹のマルタを思わせる。マルタはイエスをもてなそうと、忙しく働いていたが、妹のマリアはイエスの話に夢中で、腰を上げようとしない。それが不満で、イエスにとがめるように訴えている。しかしイエスは「マルタよ、マルタよ、あなたは心配や気苦労をしすぎる。でも必要なのはたった一つ。マリアはよいほうを選んだ。それを取り上げてはならない」(ルカ10:41~42)といった。しかしマルタはこの意味がわからなかった。マリアはこのマルタを思わせる。知的で、良識はあっても、情熱の専有する官能性がない。イエスが飲み水をもとめた「ヤコブの井戸」でも、五度も結婚離婚を繰り返し、いままた別の男と同棲しているというサマリアの女にも、イエスは官能的で、多情なところを評価した。世間的な枠を突破してしまうような、天性のようなものがイエスには決定的で、彼女に永遠で渴かない水のことを教えた。

ヨハネもマルコと同様にマリアの処女性に関して全く触れていない。しかしヨハネだけは、マリアにイエスの十字架刑に立ち合わせている。そこでイエスは「母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に<婦人よ、御覧なさい。あなたの子です>と言われた。それから弟子に言われた。<見なさい。あなたの母です。>そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った」(ヨハネ19:26~27)と養子縁組をすることになる。これはおそらく、新しいキリスト教共同体を維持していくための象徴的な意味が込められていると考えられる。

マリアの登場する場面は以上であるが、ヨハネではマリアは使徒達と共にイエスの近くに存在するように描かれ、しかし、ここでもイエスの母親に対する態度は他の福音書と変わらないものである。ヨハネ福音書のマリアは、あのマルタのような世話好きで、気苦労の多い、しかし気丈な母親であった。

第3章 民間信仰とマリア

1. 月の女神

ギリシャ神話のアルテミス、ローマ神話のダイアナ、そしてエジプトのイシス神はそれぞれ処女神の女神であることは広く知られている。月は古代より常に豊穡の女神をあらわす象徴の一つであった。

生命の根源、大地の恵みをもたらすものは太陽で、豊穡の女神はむしろ太陽に象徴されればよいというのは、気候の温暖な地域で通用することで、日本でも原始大地母神的存在の天照大神は太陽神にたとえられる。しかし、少なくとも砂漠の地では考えられないことで、太陽が自然のエネルギー源であり、生命を生み、はぐくむことに変わりはないが、この地方の太陽は地も人も焦がしかねないほど強烈で、それだけで死につながる。しかし灼熱の後には、肌にやさしい風と冷たい月の光を受け、夜露が潤いを与え生命をはぐくむのである。

ヘレニズム時代のエジプト人は月を水の源と信じ、月は水、また海や川、洪水や氾濫を司ると考えていた。ナイル川の氾濫は土地を豊かにし、人々に恵みをもたらす。これも水の恵みの一つである。この場合「水」というのは、海や川の他に胎児を守る羊水、父親の精液も含まれていた。これはエジプトに限ったことではなく、月信仰のあるところでは共通のものであり、また女性の生理を司り、出産、そしてその苦痛を和らげるものとも考えられた。

月が満月、三日月、欠けてゆく月と姿を変えることは、原始母神の三相、つまり乙女、成熟した女住、老女に対応している。また月の女神は月の自転と公転の28日に合わせて、毎月一度沐浴をして処女に戻る。満月には安産、新月には子をはらみやすいと結婚式が多く行われたのは、このときに月の女神と太陽神が契りを交わすと信じられていたからである。

月は水を司り、生殖力、また治癒力を持つと考えられていたが、その意味合いでは女性原理だけでなく、男性原理も備えていて、それ自身で生命の根源たりうる両性具有な存在だったといえる。しかし、生命をはぐくむ月は女性にこそそのイメージがあってもよいが、では、月と対をなす太陽についてはどうだろうか。

2. 太陽神

キリスト教の新しい台頭において、はたして生き残りが可能かどうかは太陽神との戦いにかかっていた。キリスト教は異教徒の太陽神崇拝を排除することでなく、積極的に取り入れることでこの戦いに勝利した。キリスト教がヨーロッパ全土に広がったのは、土着の宗教を利用したところにあった。

主の降誕の日、つまりクリスマスは12月25日に祝うが、この日はまさに異教徒が太陽神を崇拝する日であった。クリスマスと同様に、盛大に行われる祭りに復活祭がある。復活祭の祝日は年によって異なるが、春分の日後の満月に続く最初の日曜日である。春分の日は冬と春の分岐点であり、太陽が長い眠りから覚め、春に向かって運行を始め、夜より昼が長くなっていく。復活祭はキリストが死に打ち勝ったことを祝う日だが、この日以上に太陽の眠りからの復活と、キリストの復活とを関連付けるにふさわしい日はなく、実はこの日は、異教徒が太陽の復活を祝す日としていた。1492年頃のケンブリッジ大学図書館所蔵のキャロルの一節である作品にこうある。

太陽の光 (the sone beame) がガラスをとおしてはいつていくように、慈愛の母よ、神のひとり子 (the sone of God) があなたをとおし、御心どおり、人となられた。

キリスト教は神のひとり子、キリストを異教の神、太陽神になぞらえキリストを太陽神として提示することで、異教の民の改宗をはかった。

ギリシャ神話の太陽神ヘリオス、ローマではソルと呼ばれた男神の太陽神を信じたギリシャ人やローマ人は、月の夜に太陽の熱を抱き続け、次の日に太陽を産むと信じていた。月は太陽の母であり、母に産み出された太陽は再び母に光を与え、互いに力を与え合い宇宙の生命の根源となった。エジプトでは、女神ヌートが太陽の母を演じた。15世紀イギリスのキャロルでも、月のマリアのほうが太陽であるイエスよりも明るいと歌われ、この時代のイギリスにも同様の考えがあった。また、東南アジアにも同じような信仰があり、インドネシアのモルッカの島々では、モンスーンの季節に太陽神が天から地に降り、大地母神と交わり母神をはらませるという信仰があり、モンスーンのもたらす雨は太陽神の精液だと考えられた。

以上のように、多くの神話や伝説、詩が、月と太陽の関わりを賛美しているが、宇宙の平和と秩序はまさに両者の調和ある運行によるもので、太陽と月の仲が悪くなると、秩序は乱れ、混沌が地にはびこることになる。

3. 月の女神マリア

多くの民にとって、月は豊穡の女押であり、古代ギリシャ、ローマ、エジプトの民は豊作や天候、子宝を月に祈願した。中世キリスト教徒はその同じ願いをマリアに捧げた。マリアが月の女神だったことは多くの資料に残っている。

中世イギリスの宗教劇において、もっとも人気のあったものに「ノア劇」がある。ノアの洪水を主題にしたこの作品で、ノアの妻に人気の秘密があった。聖書にノアの妻については記されていないが、どの劇にもノアは大変な恐妻家で、男性の優位性を保証されていた中世の社会においても例外はつきものであった。新世界の建国に選ばれた一人の男も家では妻に尻にしかれるといったような二面性でとらえるのは、中世の知性の特徴である。この劇のノアが洪水の知らせを持って帰宅した場面である。妻はこの知らせに対して、くだらぬ夫のたわごとと反撃するところで、妻の言った言葉に、「分娩を助けてくれたマリアさまに誓って」という一節がある。当時の思想に聖母マリアが、出産を助け、産婦を守護するという民間信仰があったことが窺える。

聖書の聖句にもマリアが月の女神であることを象徴する言葉がある。「また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。」(黙示録 12 : 1)この女性がマリアであると解釈されているのは、広く知られ、また、「曙のように姿を現すおとめは誰か。満月のように美しく、太陽のように輝き旗を掲げた軍勢のように恐ろしい。」(雅歌 6 : 10)と表現されたこの女性もマリアとされている。恵みのキリストを地に送るマリアを象徴するに夜空に輝く月ほどふさわしいものはない。人類の救済に、キリストと共に互惠関係をあらわすのに夜の女王である月と、昼の王である太陽ほどぴったりと表現するものはない。

古代の大地母神信仰では、太陽を生むのは月であり、母なる月の光のほうが、子なる太陽よりも明るいという信仰は、中世キリスト教徒の民間信仰のなかにもあったことは先に述べたキャロルで紹介した。教義では月を照らすのは、太陽であり、マリアもイエスの母となり、イエスの光を受けて輝いた女性であるといえるが、民間信仰と教義の間の隔たりは大きく、民衆はどちらを信じたらよいかと疑問を持たざるをえない。しかし人々は、マリアはイエスの母であり、そけゆえ子の上に立ち、イエスは神の子であるがゆえにマリアを凌駕すると考え、民間信仰と教義の隔たりに何の疑問もなく受け入れることができた。

4. マリアの神格化

神の子イエスがマリアの胎に宿り、人となったなら、マリアも同様に、母の胎を借りて肉体を得た神的な存在だという考えが生まれてくる。つまり、マリアもイエスも同じようにもともと天上の存在だったものが地に降りてきたというものである。中世の神学はこれを、「無原罪の御宿り」と呼んだが、婦人の胎内に子供が直接挿入されたという古代の思想に通じるもので、中世に生まれた新しい思想ではない。

「主なる神が私をととても祝福して下さったことが今わかりました。みてください。寡女は寡女ではなく、子のない女が孕むのです。」（ヤコブ原福音書4：4）このようにマリアが、母アンナの胎内で宿ったのは、12月8日とされている。15世紀には、この日が教会の正式な祝日とされた。ヤコブ原福音書のように、肉の交わりなしで、マリアが誕生したという信仰がヨーロッパで一般化したのは10世紀頃のことで、教会史によれば、東方教会よりノルマン人がこの信仰を受け取り、イギリスへ伝え、イギリスからフランス、フランスからイタリアへと伝えられたことになっているが、その起源は大地母神信仰まで遡れる。

「無原罪の御宿り」の美術的表現を見ると、マリアの無原罪を象徴するように、しばしば原罪との対比という手段がとられる。マリアは全身を太陽の光に包まれ、足下には月は踏み、アダムまたは、エバが倒れたり、ひれ伏したりしている。また、罪の象徴である蛇の頭を踏みつけているものや、地球にまわりついている図柄もある。マリアに踏みつけられている蛇は、いうまでもなく原罪の象徴だが、この蛇に注目してみたい。

キリスト教では、蛇は罪の象徴と考えられているが、これはむしろ例外的なことである。日本、中国では、蛇は十二支の一つで、皮がむけるたびに生まれ変わることから、幸福、不老不死、豊穡のシンボルとされている。中国の正月の祭りにへび（龍）はつきのものである。人々は龍に健康を祈願し、また龍は地にうるおいをもたらす雨の神で、干ばつや水不足に悩むと龍神に供え物をして、雨乞いをした。古代シュメールとバビロニア最古の文学作品「ギルガメシュ叙事詩」では、不死の薬草を盗んで食べ、不死身になるのは蛇であり、ギリシャの豊穡の神ディオニュソスは蛇の冠をかぶり、医学の神アスクレピオスの象徴も蛇である。

また、皮を脱ぎ生まれ変わるということから、月と結びつけられ、女性の月経に関係してくる。蛇に咬まれると、月経を迎えると信じている民族もいる。このように蛇が悪の象徴ではなく、豊穡と水、そして、再生と悠久の神であることは、キリスト教以外では珍しくなく、永遠の命の象徴となっている。

蛇を悪の根源ととらえる考え方は、旧約に基づくものだろう。「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった」（創世記3：1）この蛇は、エバを誘惑して、禁断の知恵の実を食べさせ神に反逆させた。また、ヨハネによれば、創世記のこの蛇を、「悪魔でもサタンでもある」と見なしている。このことから、キリスト教では蛇が悪の象徴とみなされるようになった。しかし、先述した、古代アジアの蛇崇拝の名残を聖書にも見つけることができる。

「出エジプト記」（4：1～5）では、モーセが神の使者であることをエジプト人に示すため、神はモーセの杖を蛇に変えてみせる。モーセによって地に投げられた杖は蛇へと変化し、彼がこれを手に取ると、また杖へと戻る。再生能力を持つ蛇への信仰がなければこのような場面は記されない。また、同じ「出エジプト記」（7：11～12）では、モーセの兄アロンが、ファラオの前でエジプトの魔術師たちと知恵較べをしたときに、アロンは杖を蛇に変えてみせる。魔術師たちも同じようなことをしたが、アロンの杖は、彼らの杖を呑み尽くしてしまった。ワニの上に仁王立ちになるホルス像を刻んだ護符がエジプトで作られたのも、この蛇の恐怖から逃れるためであった。

また、旧約には次のような場面もある。イスラエルの民はエジプトを出て、エドムの地を目指した道中、その困難さに耐えられず、モーセと神に不平を言うようになる。神はこれに怒り、炎の蛇を民に送る。蛇は民を咬み、多くの民が死んだ。人々はモーセに助けを求め、モーセもまた民のために祈った。それを見た神はモーセにこう伝える。「炎の蛇を造り、それを旗竿に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る」（民21：8）モーセは青銅で蛇を造り、それを見上げた者は全て生き返った。この場面からは、蛇の持つ治癒力への信仰が読み取れる。ヨハネは、イエスが天に昇ることを預言するのに、この場面を用いている。「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を持つためである。」（ヨハネ福音書3：14～15）。新約には蛇は賢い良い意床で用いられている箇所がある。「私はあなたがた遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタイ10：16）と異教徒たちに弟子を遣わす。聖書には、蛇を悪の象徴、悪魔ととらえる箇所もあれば、再生力、生殖力、治癒力をもつ賢い生き物とする聖句も多く見つかる。

復活祭には生殖、生命の神秘、そして再生と豊穡のシンボルとして卵がつき物であった。現在は鶏の卵がおもに用いられるが、もともと蛇の卵であった。キリスト教が始まって数十年の間は、月と星を崇拝するオルフェウス教が依然として信仰されていた。世界は蛇によって創造され、原始母神が蛇に姿を変え、神聖な

る蛇オピニオンと交わり卵を産む。春分とともに太陽神ヘリオスがあらわれ、その卵を暖めるのだが、太陽神によって暖められたがついに孵化し、世界が生まれたのである。また、別の伝説では、混沌から生まれた豊穡の女神エウリュノメが蛇のオピニオンに強姦され、エウリュノメは卵を産み落とす。その周りを7回まわって暖め卵をかえす。こうして宇宙が生まれた。女神に卵を産ませ、宇宙を創造した神話から、蛇は男根の象徴ともなっている。

女神に付きまとう男性原理の象徴は、エジプトの女神イシスにもある。イシスはもともと天地に君臨する大母神であったが、時代ともに夫オシリスの配偶者として、オシリスとともに崇拝されるようになる。オシリスは異母弟テュフオンの策略によって、生きたまま棺に封じ込められ、河に流される。それを知ったイシスは嘆き悲しみながらも棺を見つけるが、テュフオンに見つかってしまい、オシリスはばらばらに刻まれてしまう。イシスは一つ一つ体の一部を見つけては葬ったが、一つだけ見つからない部分があった。それは男根であって、イシスは自分で男根を作り、葬った。以来その地は男根崇拝の場所となった。別の伝承では、身体の各部分を集めて、息を吹きかけよみがえらせ、受胎して息子ホルスを産み、この息子が父の復讐を遂げたという。

さて、これらのことから「無原罪の御宿り」のマリアについて較べてみる。マリアの足下に描かれている蛇は、キリスト教によれば、悪や罪の象徴である。それをマリアが踏みつけているということは、無原罪のマリアが罪を克服したということで、神がエバを誘惑した蛇にむかって言ったのろいの言葉が、マリアによって成就されたと解釈できる。また、月と蛇を踏みつけているということは、マリアが月経を司る月と蛇を征服したということ、つまり、マリアが月経なくして子を産んだということで、月と蛇はマリアの処女降誕の奇跡を象徴している。

神話的レベルでは、蛇は男性原理の象徴であり、皮肉にもマリアの周りには、太陽、蛇など、男性原理が集まる結果となっていて、古代の女神に付きまとうそれと同様の女神像が生まれた。したがって、マリアの降誕説をたどっていくと、神的永遠の女性を両性具有の神とみなす原始的民間信仰にたどりつくのである。

第4章 聖母マリアの美術

1. ルネッサンス

マリアの存在が、キリスト教においては、先述したとおり、聖書でもさほど重要視された存在として書かれたものではなく、むしろ民間信仰のうちにおいて、

神格化されたといつてよい。歴史を考える上でマリアの存在、聖母の存在は欠かすことのできないものである。とすると、逆に、マリアを考えるためにさまざまな分野があるということではないだろうか。人間が、文化を伝えるにあたって用いられる手段は、口頭、文字、そして、美術である。この章では、その美術において、マリアがどのようにとらえられたか考えてみる。なかでも、ルネッサンス期の絵画に注目した。

そもそもルネッサンスというのは、14世紀以降、人間性の復興を目指して、イタリアに始まり、全ヨーロッパに拡大した文化運動で、周知のとおり、フランス語で「再生」を意味し、「文芸復興」と訳される。イタリアに早くからルネッサンスの機運が起こったのは、十字軍以降、東方との接触によっていち早く都市化が進み、経済、文化が発展したからである。すなわち、ビザンツ・イスラム世界とヨーロッパ内陸部とを結ぶ地中海交易路をおさえ、中継商業や毛織物、絹織物工業にエネルギーを注いだイタリア都市は、フィレンツェをはじめとして、早くから周辺地域の封建領主層を都市貴族化し、ギルドの親方層が実権をにぎる自治都市国家の体制を固めていたことにある。

しかし、14、5世紀になると、一般市民層と親方層の対立が激化し、これにキペリン党とゲルフ党の対立も絡み、都市は政争の巣窟となった。この混乱に乗じて台頭したのがデポスタと呼ばれる専制者で、メディチ家はその代表ともいえる。以後、ほぼ15世紀全体にわたりこの成り上がりの金融業者のもとにフィレンツェは支配される。この支配下のもと、「自由のフィレンツェ」は「美しきフィレンツェ」になった。つまり、ルネッサンスの最盛期を迎えることになった。しかし、15世紀末期になると、イタリア都市は衰えの兆しがみえるようになり、イタリア戦争では、ローマ劫掠に至ってその破壊力を示し、すでに中央集権へ歩みだしている西ヨーロッパ諸国と、分裂状態のイタリアとの力の差は歴然であった。国際政治の舞台を地中海から、大西洋に移し、イタリアはヨーロッパの地方都市、地方国家へと転落し、ルネッサンス文化は衰退した。「君主論」に専制君主の出現を待望し、全ての道德規範を超える国家理性の概念を近代政治への遺産として残し、祖国の安定と平和を願った、イタリア・ルネッサンスの理性マキャベリの要請もついにむなしかった。

現在ルネッサンスは、中世から近代への過渡期の文化の問題と考えられ、定義するには自然科学、合理的思考の成熟という点に注目しなければならないが、ここでは、ルネッサンスの美術という点についてのみ触れたい。ルネッサンス美術は初期（15世紀）と盛期（16世紀）に大別される。初期ルネッサンス絵画の代表者はボッティチェリだろう。マサッチョの大気遠近法と量塊表現の発見、フラ・

アンジェリコの宗教的心情の造形的表現など、ボッティチェリはこれら初期ルネッサンスの全ての性格と特徴を統合し、克服し、繊細、巧緻な線描をもって次々と傑作を生み出した。やがて、盛期ルネッサンスに入ると、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロらの巨匠が輩出し、より高い芸術様式の追求が始まった。そして、内容と形式、色彩と線、形体と空間、これらの完全な統一と調和を成し遂げたラファエロもこの時代の画家である。少し前置きが長くなったが、この章では、聖母マリアの美術がどのようなものであるのか、また、ルネッサンスに活躍した代表的な画家がどのように聖母をとらえたか、みってみる。

2. 聖母マリアの美術

マリア像は造形においても、キリスト教信心同様に、中心的な主題をなしている。前章でマリアが古代の女神に代わって崇拝されてきたことに触れたが、そのマリア崇敬が美術に大きな影響を与えている。しかしまた、美術それ自身が、逆に信仰を促したり、信心を形成したりしている。近代まで多くの信者が文字を読むことができず、ルターが福音を述べ伝えるために、視覚的描写を用いたパンフレットを利用したのと同様に、彼らにも美術がその代わりであった。マリア像はキリスト教芸術創造に最も好まれたテーマの一つであり、約 1500 年にわたる神学と、人類学がこれを形成した。しかし、この表像は実はさらに昔にさかのぼり、思索、瞑想、感情が生み出した表像の量は体系化できないほどである。マリア像の故郷は東方であり、最初はキリストに献じるためのもののなかに現れる。ところが、エペソ公会議（431 年）以後、マリアの自立的表現が出現し、843 年に聖画像論争が終わると、マリア像の形成は以前にもまして盛んになった。

マリア像のうち、好まれて描いたのは聖母子像や聖家族像といったもので、マリアがキリストの母であり、テオトコス（神の母）ということ強調したものに人気があった。東方ビザンティン美術のモザイク画やイコンに表された聖母子図からは、後の西欧の聖母子図のスタイルに大きく影響したものが生み出された。それらの形式は特に、イコンにおいては、いったん定められた特徴は絶対視され、長く継承されることとなり、西欧における聖母子像もそのスタイルを大きく変化させることにはならなかった。形式は実は数多いが、そのうち基本的な形式について簡単にまとめてみたい。

a. プラケルニオティッサ型

立像で、両手を掲げた姿勢。すでに聖母お馴染みのフード付きのマントと光背を身に付けている。しかし、この場合は幼児キリストを伴わない単身像が特徴。

b. プラテュテーラ型

聖母は a と同様の立像であるが、胸の中央に円形を持し、ここに幼児キリストが描かれる、母子像になっている。

c. ホディギトリア型

聖母子は左手はキリストを抱き、右手は添えるように胸前に置く自然な姿勢、このポーズは広く西欧に継承された。

d. ニコポイ了型

聖母は正面を向いて玉座に着き、膝のうえにキリストを座らせる。

e. エレウサ型

憐みの聖母の意味で、母子が頬を寄せ合う半身像として表される。

この他にもガラクトロフサ（乳房をふくませるマリア）や、グリュコフィルサ（優しいマリア）などがあるが、これらの形式は比較的表現の自由になった、ルネッサンス後期においても受け継がれた様式である。

中世後期における、聖母崇拝の反映として、14 世紀頃から西欧では祭壇画の中央本尊に、幼児キリストを抱く聖母像が描かれ、それは、長い間礼拝図として中心的位置を占めるようになった。しかしながら、それは画一的なものでは終わらず、優れた画家たちが時代の要請にこたえるように、あるいは、個人的な洞察を加えろようと革新していった。ルネッサンスの人間性回復の動きのなかで、画家たちは、母と子の親密な愛や、やがて死すべき我が子の運命を悟った母親の悲しみを表現するようになり、聖母子像は礼拝図としての制約を離れ、多彩に表現

の場を拡大した。ルネッサンスが頂点に達する 16 世紀には、かつて主役だった宗教画に取って代わり、世俗的な、エロティックな裸体表現をみせる神話画や、教訓を含んだ風俗画が盛んにえがかれるようになった。しかし、聖母の主題は母子のドラマとして、形を変えながらも生き延びた。そのように偉大な画家たちが、マリアをどのようにとらえ、聖母子のどの点に注目したか、またそれをどのように演出したのだろうか。

3. ボッティチェリ

1444 年から 45 年にボッティチェリは、皮なめし職人を父としてフィレンツェに生まれた。ドミニコ派修道院サンタ・マリア・ノヴェッラ地区、オニサンティ教会の近くで育った。この教会のために、後に傑作の一つを描くことになる。よその町に短い期間住んだことを除けば、生涯にわたり、この地区に住み、有力なつながりを得た。例えば、隣にはヴェスプッチ家があり、そこからあのフィレンツェの支配者メディチ家と親しくなり、生涯にわたり作品の注文をしてくれたのみならず、有力な注文者を紹介してくれた。

彼の作品は単に、神話あるいは宗教的情景のなかに、人物や魅力の美しさを再現するのとは異なり、ある種の哲学的、政治的、宗教内容が込められている。したがって、15 世紀後半のフィレンツェの文化や政治を理解する鍵となっている。しかしながら、やがて彼の作品の基礎をなす哲学的な理念に代わって、異なった世界観が幅を利かすようになり、政治的、宗教的状况の変化とともに彼の絵画は次第に忘れ去られていった。16 世紀半ば、マエリスムの時代に彼の作品はもう一度もてはやされ、芸術家たちはその優美な線や、技巧的なポーズを誉めそやし、細密画のような手法に魅せられた。だがその後ボッティチェリの評判は驚くほど衰えたが、19 世紀にルネッサンスに対する関心が高まると、その作品は再発見され、今日に至る名声を博した。

さて、ボッティチェリは数多くの聖母子像を描いている。初期の数枚の聖母図を始めとして、ルネッサンス初期を代表する聖母像が彼によって生み出された。初期の聖母像は彼の師、フィリッポ・リッピの聖母子像に酷似している。ボッティチェリが画家として駆け出しの頃の作品には、まだ彼の独自の構図は出来上がっていないといつてよい。しかしながら、すぐに彼は自身の手法を取り入れる才能を発揮した。早いほうの作品に見られたマリアの顔は穏やかで平板なのに対し、資料 1 から、力強さや、自然主義的な造形が見られ、光と陰の交錯によって、解剖学的な構造がはっきり現れている。また、マリアの後ろに描かれた背景が、空

間的で具体的である。マリアは4本の柱に支えられた丸天井の下に座り、その背後には、マリアの純潔の象徴たる薔薇の木の庭園が広がっている。

(資料1) 聖母子 (薔薇園の聖母) 1470年頃 (図版は省略)。

(資料2) 聖母子と5人の天使 (マニフィカトの聖母) 1480~1481年、Firenze, Galleria Degli Uffizi (図版は省略)。

1480年代初めに、ボッティチェリは「マニフィカトの聖母」を制作した(資料2)。どうやらこれは当時の彼の最も有名な聖母像であつたらしく、この作品を元にした同時代の模写が5点存在する。この聖母像はボッティチェリの最も高価なトンドとなっている。これほど多くの黄金を費やした絵画は、この芸術家の他の作品に例を見ない。黄金の絵の具は最も高価なもので、つまり、注文主が富福であつたか、または特別な注文があつたと考えられる。ここではマリアを、書き物をしている形で表現した。彼女は2人の天使が差し出す本の最後の行を書き終えようとしている。優雅な手つきで、羽ペンのインク壺に浸し、幼児キリストが口述する文章を本に書き加えるところなのである。マリアが書き加えようとしている本の右ページには「マニフィカト」つまり、マリア賛歌の最初の数語が認められ、この作品のタイトルの由来とはなっている。

(資料3) 聖母子と6人の天使 (柘榴の聖母) 1485年、Firenze, Galleria Degli Uffizi (図版は省略)。

先の「マニフィカトの聖母」同様、この資料3の「柘榴の聖母」数多い礼拝画の一が、これも円形画の形をとっている。円形画に15世紀に大流行し、私邸やギルド会議所に飾られたものが多い。このような画面での形に沿った構図は、「マニフィカトの聖母」を見るとき、マリア以外の人物を登場させようとして、その人物を枠内に収めようとボッティチェリが苦労したのがよくわかる。しかしながら、この「柘榴の聖母」は幼児キリストが画面の中心点であり、他の人物が邪魔することなく収まっている。この絵の柘榴は、キリストの受難の象徴と考えられ、種

が多ければ多いほど、イエスの苦痛の大きさを表している。また、柘榴の花は聖母とその純潔のシンボルともなる。また、天使が腰に巻いている薔薇の花輪はしばしば、聖母のロザリオを暗示するものであり、赤い薔薇は殉教を表している。

ボッティチェリの聖母に関する作品はまだまだ存在するが、彼はマリアをどのようにとらえていたのか、また、マリアという人物をどう表現したのだろうか。ボッティチェリはその生涯で、何度か手法を変えて制作にあたっている。したがって、表現の内容も変化してくる。しかし、彼の作品の根底にあるものは変化することなく、聖母をとらえている。代表作に「春」があるが、この中に登場する古代の女神達は春の訪れとともに、人間的な性格を備えてくる。ボッティチェリが影響を受けた古代ローマの詩人で哲学者のクレティウスの「事実の本性について」で、彼は性的、肉体的な愛欲に目覚めたことを次のように述べている。「(中略) あなたは一切のものの胸に甘やかな愛を流し込み、種族を増やす欲望を駆り立てる。」聖母像を描くとき、その優美な線や技巧的なポーズを駆使し、マリアが純潔で、清純な神の母であることと共に、どこか人間的な実在しうる人物として描いたのではないだろうか。

4. レオナルド・ダ・ヴィンチ

1452年レオナルドはイタリア中部のヴィンチという小さな村で、私生児として生まれた。周囲の人々はそれを隠そうとはしなかった。彼は「罪から生まれた」のではなく、「愛から」生まれたのである。レオナルドが芸術活動を始めたのは、伝承によれば、ヴェロッキオの工房に入ったのが17歳の時(1469年)、しかし、一般に徒弟というものは、もっと若い頃から弟子入りするものではないだろうか、いずれにせよ、彼が早熟の天才であったことは間違いないのだが。

レオナルドはまさしく時代の落とし子である。彼は芸術家であると同時に、科学者であり、それは彼において、分別しうる分野ではなかった。科学は芸術分野のための必須の基礎であり、芸術は科学探求の最良の手段であった。「モナ・リザ」や、また人物の描写は彼にとって人体解剖図や、飛行機の設計図を作成するのと同じことで、科学と芸術が一つに結びついた全人間的な営みであった。中世以来、「手先の業」として、自由学芸よりも、一段と低い地位に貶められていた絵画を彼がはっきりと「精神の業」と規定したのもそのためである。レオナルドの経歴

や技巧、または彼を取り巻く背景について触れだしたら全くきりがないので、ここまでとして、彼がいかに聖母子像を描いたであろうか、考察してみたい。

彼の絵画に登場するマリアは受胎告知の場面を始めとして、「フノワの聖母」、「カーネーションの聖母」などさまざまだが、図像史から言うと、前例のないのが2点の「岩窟の聖母」である(資料4、5)。この構図の酷似した2つの作品は、伝承によれば金銭的トラブルによるもので、最初の作品できちんと報酬が支払われず、もう1点描くならば毎年の報酬を保障するということから、第2作が制作されたこととなっている。しかしながら、レオナルドが本当に2作目を作成したかは疑問視されるところで、今日では、アンブローオ・デ・プレディスあたりのレオナルドに影響を受けた画家による再制作と見るのが多数意見である。

(資料4) 岩窟の聖母 1483~86年 Paris, Musee du Louvre (図版は省略)。

(資料5) 岩窟の聖母 1503~06年 London, The National Gallery (図版は省略)。

先に述べた通り、図像史的に前例のない構図であるが、中心にはマリア、告知の天使ガブリエルに寄り添われた幼児キリストが右手を挙げている。母を指差しているようだが、彼女に抱えられている幼児ヨハネと交感しているかのように見える。左手でキリストを紹介するマリアは純潔の青い衣をまとい、腹部に金色の布を着け、聖なる受胎の後を示そうとしている。岩窟は雅歌の「閉じた園、封じた泉」の変形と変えられ、泉は当然の必要物である。またエゼキエル書の神の入った門の変形とも考えられ、神の入ったことを物語っているのかもしれない。資料5の作品を見てみると、先のものと比較してみると、マリア、キリスト、ヨハネに円光がついていること、また、天使が有翼となっていること、ヨハネが杖を持っていることに気が付く。前作と比べ、宗教画の定型に復されている印象が強い。注文主の強い意向が見て取れるが、金銭的トラブル、またレオナルドが関与していないことも念頭に入れる必要があるのではないだろうか。

(資料6) 聖アンナと聖母子 1510年、Paris, Musee du Louvre (図版は省略)。

資料6の絵画の主題は人物であり、マリアを中心として、その母と子の三人の処女受胎による愛の継承の物語である。絵画上では「聖家族」とよばれるもので、先の「岩窟の聖母」ではアンナではなく、ヨハネであった。この場合は神聖に直徑な3人のみで、一番後ろに座しているアンナ、その膝に腰をおろし、幼児キリストに手を差し延べるマリア、殉教のシンボルである子羊から引き離されるキリスト。ここでは、マリアが中心となっているが、アンナとマリアがほとんど同体になっていて、そして、2人の顔が同一に近い近似性を持っているのは、それぞれ処女懐胎によって生まれた母子を示す絵画的表現と見ることができる。

レオナルドのレオナルド的なものの象徴ともいえるべきものは、やはり「モナ・リザ」であろう。この絵画がさまざまな議論をよんでいるのは周知の通りであるが、これにモデルがいるとすればそれは肖像画といわざるをえないが、今日明確な特定に至っていないのは、肖像画とみなす傾向にないのではないか。だとすれば、より性格と次元の異なる絵画としてその存在がある。後世の画家達はその模写に励んだのもそれが一因ではなかろうか。具体的にいうならば、あらゆる女性を象徴した、「女性的なもの」の一種の理想であり、ヴァザーリが『芸術家列伝』で、「心地よい微笑みがあるが、そこからは人間的というより、神的なものがみてとれる」と述べた強い印象に裏打ちされるように、この上なく神的な作品の卓越性が十分に感じられるのである。

「モナ・リザ」のヴァリエーションである「聖アンナと聖母子」は前者の女性像に凝縮されている母性像がより顕在化してきたもので、「岩窟の聖母」に始まるレオナルドの自己確立の一端で、こうした女性像をマリアへと還元してきたのではないだろうか。

5. ラファエロ

1483年4月6日中部イタリアの小都市、ウルビーノにラファエロは生まれた。この日は彼が37歳の若さで死亡した日と同じ聖金曜日のことであった。このことは、歴史家達がラファエロの人生や性格が、作品に比べ著しく後退して見えることで、彼に神秘のヴェールをかぶせる好材料となった。神のごとき天使の領域から舞い降りた、神童であるとの評価さえ得たこともあった。しかし、ラファエロはレオナルドにも、ミケランジェロにもなれなかった。レオナルドほど鋭い観察者にはなれなかったし、ミケランジェロほど人間と神との対立を鋭く敏感に感じ

取れなかった。だが、彼はそれほど深く考える人間ではなかった。彼は民衆の一人であったのだ。彼の芸術が宗教の大衆化するバロック期に、権威をもって他の2人を押しつけて君臨するのを、後の歴史に見るならば、彼が後世で果たした役割の大きさは、その大衆性にあったと感じ取れる。

(資料7) ひわの聖母 1507年 Firenze, Galleria Degli Uffizi (図版は省略)。

ケネス・クラークが言うように、ラファエロが至上のヴィーナスの作者であったなら、時代は後にその対極である聖母の画家たらしめた、ということになるだろうか。あるいは、彼にとっても、時代にとってもマリアは天上のヴィーナスであり、ヴィーナスが地上の聖母であったといえる。

資料7はレオナルドの資料6の下図に従い、子と母との関係はミケランジェロにヒントを得ている。マリアを中心として、彼女の左手に抱かれたヨハネ。ヨハネが差し出す、キリストの茨の冠を暗示する受難のシンボルであるひわに、手を差し延べるイエスが描かれている。

ラファエロのフィレンツェにおける古典様式修行のための聖母子ピラミッド形構図の、究極の完成がこの資料8の緑野の聖母で見ることができる。やはり、これもレオナルドの「聖アンナと聖母子」が採り入れられているが、それからは内容的にさらに別れを告げている。この絵には、円錐形のフォルムが採用され、いかにも古典様式を思わせるが、A・マリア・ブリツィオが言うように、あらゆる者を満足させる構図と共に、もっとも庶民に受け入れられやすい美的調和を同時に完成させている。アカデミアンが賞賛する構図の科学もラファエロは、十分に取り入れ、また、その円錐形のフォルムが階層を越えて、信仰と、信心が人の内に芽生えるような印象を与える。レオナルドのような生動するような形や情動は一切取り除かれ、白昼の明証性を持って示された神の恵みだけがあり、信心深い大衆に愛されやすいものとなった。つまり、解かりやすいということで、自然へと解放された快さ、万人受けしやすい若い母親、無邪気な幼児の微笑みとがすぐに理解されやすいのである。レオナルドやミケランジェロのような試みは一切ないところにマドンナの庶民性がそこにある。

(資料8) 緑野の聖母 1507年、Paris, Musee du Louvre (図版は省略)。

(資料9) フォリーニョの聖母 1511~12年、Roma, Pinacoteca Vaticano (図版は省略)。

フィレンツェの宗教画のなかでも、最もフィレンツェ的なものは、座に聖母、左右に対称的に聖人を配したもので、「天蓋の聖母」を加えればラファエロの一貫した聖母子像が窺えるが、マドンナのバロック的局面を示唆するとして、この資料9を加えた。天上と地上とを分割してしまう形式で、とくに北イタリアで発達したものである。フィレンツェが知らなかった新しい様式としてラファエロはその幻覚的要素を採り入れた。光と雲と天使という法悦的なヴィジョンで、聖母が宙に浮いており、やはりそこには大衆受けしやすい神聖な構図で、マドンナの庶民性がここでも表れている。

ラファエロは巨匠達の中で、最も日常的な、健全な人々のそれであり、僕の信仰は解放されたような中世末期の人々なら誰もが持っていたような自然な折衷信仰であった。彼の芸術は先に述べた通り、容易に理解しやすい大衆受けした作品が多く、それによって、多くの評価は一部で、創造力の死や、血の気のない蠟人形のようなとも言われたが、確かに彼の作品で、「刹那よ、とどまれ」ということにはできない。しかしながら、大衆に信仰を呼び起こさせる聖母の表情や構図の明確性は評価に値する。マリアを見てみると、その神聖なところが常に強調され、神の母であり、無原罪懐胎であることは言わなくとも伝わる。そして、それが幼児キリストをいっそう神聖なものとしているのではないか。

第5章 あらゆる時代の女神像 (まとめ)

歴史を追ってみて、聖母マリアが解釈の鍵になる分野が数多く浮上してくる。この鍵として、マリアの重要性は、マリアに対する信仰の右無には関係ない。歴史を解釈するのにその時代の感情ないし、情念を理解しない限りその本質をつかむのは不可能であるからである。西欧の心と信仰の歴史は、聖母マリアの占める位置に注目しない限り、感得に及ばない。大衆が信徒として、信じたものは、教会の公会議や教義、典礼であるのか、また、逆に現代では、大衆の信じるのが教義や信条とは全く分離した、別のカテゴリーであるものなのか、いずれにせよ、聖母マリアがこの歴史の問題に相応なのは明白であろう。

ルカ福音書に見られるマニフィカトの言葉は、その後約 2000 年において、繰り返し真実としてよみがえり、今日に及ぶ。マリアは、世俗全盛の時代にあって、また、さまざまな迫害を繰り返し受けながらも聖母として、その力が衰えることがないのか。キリスト教の公会議でマリアが教義や信条の厳粛な対象にならなかったことではなく、実にマリアが、人の心に最も親しい存在であったからである。かかる伝道者や迫害者は言うに及ばず、歴史家や、比較研究者も、宗教が時代から時代に受け継がれる際の連続性と粘り強さを強調する。信仰それ自体が消滅してもはるかに後まで残る礼拝形式への執着がその典型である。

これまで、マリアについて、聖書、古代女神像、そして、芸術と迫ってみたが、いかなるところにおいてもマリアが時代の闇に消えうせることはなく、姿を変え、信仰内容を変え、今日に至っている。聖母としてその役割は、人が生まれる根源に位置するところから、万人がそこへ自らの出生をたどり、行き着くところであって、全人類の根底を成す存在として君臨することである。一人一人のあらゆる感情がそこに集約されることになろう。マリアはその役割に十分な存在であり、それは歴史と万人の信仰が証明してくれる。